

## 音楽分科会

科研費「小中学校教員と共同開発する言語活動で表現と鑑賞を一体化させる音楽科授業プラン」  
(基盤研究 C23531248) を受けて取り組んだ研究実践2年目のまとめ

新山王政和 (音楽教育講座)

太田理恵・小野行俊 (附属岡崎小学校)

加藤幸子・富所妙子・野田英里子 (附属名古屋小学校)

井垣智恵・松本亜由子 (附属名古屋中学校)

矢崎 佑 (附属岡崎中学校)

### 1 実践研究の概要

音を出すことと聴くことは可逆的かつ不可分なものであり、他者や自己の演奏上の違いを聴き取れるから演奏表現が幅広く豊かになり、表現の技術や知識があるからこそ演奏上の変化を聴き取ることができる。“知覚、分析”をコアとして表現と鑑賞を一体化させた活動によって、音の塊や音の羅列へ自分なりに音楽的意味や価値を付加しながら感情や情動を呼び起こす仕組みや仕掛けを思考判断し、それを言語活動によって他者との共通理解に高めた上で再び表現活動や鑑賞活動へ還元する実践を本学附属学校と連携しながら模索している。音や音楽を形づくる要素や仕組みは、表現活動のみならず鑑賞の際も同じように作用している。事実、筆者が中学校の先生方と取り組んだ先行実践では、「まず自分なりに感じ取ったり聴き取ったりしたことをグループ内で話し合い、それを互いに確認し合い疑問を投げ掛け合うことで熟成化させ、全体の前で披露し合う活動によってより確かな意見にまとめる。このような活動を通して生徒は曲を分析する力や聴取力を身に付けるプロセスを体験し、それを他者へ伝える表現力や文章力にも繋がっていったものと考え」という方向で集約された。この結果を受け、全ての音楽活動を貫く基盤は、知覚し、聴き取り、聴き分けることだと考えられる。さらに表現と鑑賞を一体化させ「演奏しながら〇〇に気を付けて聴く。演奏しているつもりで〇〇の変化や工夫を聴き取る」のように、要素や仕組みを触媒として演奏と鑑賞を融合した活動を探るべきだと考える。

### 2 実践研究で措定した活動モデルの骨子

鏡に姿を映すように自分達の演奏を客観的に聴くことで「気付く活動」と、模範演奏と自分達の演奏を聴き比べながら演奏表現を「磨き上げる活動」を一体化させ音楽の聴き方の習得をめざす。その際の鏡として録音・再生が可能なスピーカー一体型の IC レコーダーを1校平均6台ずつ確保し、児童や生徒が自由に録音再生できるよう準備し、鑑賞のみならず表現活動の意見交換や相互評価の場面、自己評価の場面などでも日常的に活用して貰った。学習すべきポイントは“演奏”や“聴く”という行為そのものが創造的な活動であることを踏まえて次のように措定した。①聴き方のパターンや型を知る②聴く力・分析する力・想像する力③作曲者の周到な作戦を推理する力④制約の中で工夫された表現を推理する力。さらに検証ポイントを次のように措定した。①子ども達自身の練習の深まりに対する“録音⇄確認”の声掛けのタイミングや方法、掛ける言葉の吟味②自分達の録音と模範演奏を聴き比べて、その違いを感じ取れない子ども達へのアプローチの方法③技術指導のタイミング、それを促す働き掛け方④演奏表現を深めるための教師による指導の度合い

### 3 実践研究の成果

附属学校核教員が実践の成果を次ページ以降に掲載しているが、研究1年目の成果については次のとおり報告した。①「表現と鑑賞を一体化させ音や音楽を聴く力の育成をめざした実践―音楽構成要素を知覚・分析させ表現へ結びつけさせた試み―」、新山王政和、矢崎 佑 (附属岡崎中学校) ②「表現と鑑賞を一体化させ音や音楽を聴く力の育成をめざした授業実践―2」、新山王政和、加藤幸子 (附属名古屋小学校)、吉松頼美 (元附属名古屋小学校)、太田理恵 (附属岡崎小学校)、井垣智恵 (附属名古屋中学校)、石川翼 (元附属名古屋中学校) ③日本音楽表現学会全国大会口頭発表 (H24年6月、山梨大学)

## 音楽的な感じ方を育み、表現につなげる

附属岡崎小学校 太田理恵

### I 子どもの「音楽の感じ方」と「音楽の要素」をつなげる教師支援を探る

3年生の子どもたちにぬいぐるみ劇「メリーさんの一日」というナレーションと映像をみせ、その場面に合うように「メリーさんのひつじ」をアレンジしていく活動に取り組みました。追求活動のなかで、仲間の表現や仲間の感じ方に触れるための「聴く場」を設けることで、自分の音楽の感じ方や表し方の幅を広げていくと考え、子どもの授業での様子や追求活動を追った。

### II 感じ方の違いが引き出せる子どもの表現をかかわり合いの軸にする授業構想

捺摘のアレンジは、リズム、メロディといった視点でよく考えられている。しかし、捺摘はテンポのみ変えて満足している周りの友だちのアレンジとの差に「実際のとかけはなれている」と不安をおぼえていた。一方で、眞亜は捺摘のアレンジによさを感じていた。そこで、捺摘のアレンジを学級全体で聴く場を設け、眞亜の思いと捺摘の思いを語らせることで、感じ方はいろいろあることに気づかせたいと考えた。そうすれば、次のことが構想される。

○同じアレンジを聴いても、感じ方にはいろいろあることに気づくだろう。

○自分のアレンジに自信のない捺摘は、自分では気づいていない自分のアレンジのよさに気づくだろう。

○捺摘のアレンジに含まれる「リズム、メロディといった要素」と「感じ方」を教師がつなぐことで、今までテンポの工夫にしか気づいていなかった子どもが、自分のアレンジを「リズムやメロディ」といった要素の視点で見直すだろう。

[平成24年11月26日 捺摘の学習記録]

アレンジしすぎてなにがなんだかさっぱり分からないアレンジだと思っていたけど、クラスのみんなや班のみんなに聞いてもらって、わたしのアレンジにもいいところがたくさんあることに気づきました。みんなそれぞれちがう思いで聞いているから、ちがう意見がでてくるのかなと思いました。友だちのを聞いてみると、みんなちがう思いで作っているの、ビミョーな音で終わっているのや同じ音だけテンポをかえたりしていました。アレンジや作曲は気持ちや思いがかんけいしているんだなと思いました。

[平成24年11月26日 問いをうめかかわり合い 授業記録]

\*T: なつちゃんのを聴いて、みんな、今どう感じたか、教えてくれる。

\*C1: なつみちゃんの3場面のところなんだけど、なんかみんな他の子のとか聴いていると深呼吸だからずっと伸ばしてる子が多いんだけど、私とかもすごいずっと同じように息が続かないから、ちょっとはねたりしてるんだけど、それがなつみちゃんもちょっとはねたりして私と似てるなあとと思った。

\*C2: ぼくは彩花ちゃんとちょっとちがって、ぼくは3場面がおそいんだけど、なつみちゃんのは速いから、そこがちがうと思った。

\*C3: わたしは3場面でプレスをつけたんだけど、なつみちゃんのはテンポが速くてすごい伝わってきたと思った

### III 研究の成果と課題

この実践で、子どもたちの活動は「自分のパソコンの映像に合わせてみたら、合わない。どうしかた合うか」というところから、勢いよく追求に向かった。それは、まず全員で同じ場面のアレンジをつくり「場面の様子やメリーさんの気持ちを表すアレンジにはテンポ、リズム、メロディの工夫がある」ということを理解していたからである。そうすると、音楽の要素に対する見方や考え方を広げた後に、どう感じるか、どう聞こえるかといった段階へとすすんでいく子どもの意識の流れがおぼろげながら見えてきた。まだ明確ではない子どもの「音楽の感じ方・表し方」と「聴き取る力」の関係をこれからの研究で追究していきたい。

# 響きを聴き合うことで自分の表現に生かす

附属岡崎小学校 小野 行俊

## 1 目的

過去3年間の実践では、いずれの単元も目の前の子どもをとらえ、のばしたい力、足りないことを考えて授業を構想してきた。そのなかで、どの授業でも「聴く力」が足りないのではないかと考えた。表現をするには、仲間の表現をどのように聴き取るかによる。そうしないとひとりよがりの表現になってしまうからである。そこで、どのように聴き合うことで、自分の表現にいかせいでいけるのかを探る。

## 2 求める子どもの姿に迫るための教師支援

### (1) 目標となる表現をもたせる場の設定（イメージをもつ場）

自分の表現を客観的に聴くができるようになるためには、目標となる演奏が必要となってくる。そうしないと、ただ自分の感覚的なものだけで聴くようになり、それで自分の演奏や他人の演奏の善し悪しを言っても仕方ない。そこで、プロの演奏や模範演奏などを聴かせることで、目標となるイメージをもたせる場を設定する。また、ただ聴いていてもあまり意味がない。どこをどのように聴いたらいいのか、視点を絞った上で何度も繰り返し聴いたりすることで、どのように聴いたらいいのか聴くパターンを確立させていく。

### (2) 自分たちの表現に安易に満足しない意識をもたせるための場面設定

自分たちの表現を客観的に聴いて「何がよくて何がいけないのか」ということに気づく活動を取り入れる。自分たちの表現を客観的に聴くために録音・録画をする。ただ、そうすると自分の感覚で聴いてしまう。つまりは自分の表現に満足してしまうことになる。その際に、模範演奏や仲間の演奏と聴き比べることで、自分たちの表現を客観的に振り返らせる。

### (3) 仲間の表現を試しよさを実感させるための、それまでの意識の支え方

今まで、仲間の表現を聴き、その表現について吟味する場の設定をしてきたが、吟味をしてもその表現によさを感じなければ、それを取り入れようとしたり、その表現をもとに自分の表現を見直そうとする姿は生まれにくい。そこでひとり調べの際に、その子らしさを支えるとともに、いろいろな音楽の要素を使った表現を毎回の授業のなかで試す場を設けることを行う。

### (4) 聴く耳を育てる場の設定

聴く耳を育てることで、仲間の表現や自分の表現を見直すこととなると考える。そこで基礎・基本を確認するときには音色をはじめ、拍の感じ方などをどういったものかいいのか悪いのかなどを、教師の言葉がけによって子どもに音色のイメージや拍感のイメージをもたせる。

### (5) かかわり合いにおける教師支援

ア 自分たちと仲間の表現を比べ、音のバランス、音の響き、音の重なりに対する感じ方の違いを明確にするために「もっとイメージに近づくために、こんな工夫をすればいいよ、という考えはありますか」と全体に問いかけ、11班の表現をこのように工夫していくとよいという視点で子どもと子どもの考えを結ぶ。

イ 自分たちの演奏を見つめさせるために「11班の演奏について考えてきたけど、みんなの演奏についてはどうですか」と問いかけ、自分たちのイメージする「星の世界」に近づけるためにどんなことに気をつけていけばいいのか、見直していこうとする姿を引き出す。

## 3 実践の成果と課題

- ・場の設定を行う前後の教師の働きかけが大切である。そのためにどんな教師の働きかけが有効であるかを授業前の子どもの意識から考える。
- ・仲間の表現と自分の表現を比べたりするのに、どのように聴いたらいいのかを普段から子どもの意識の中にあるとないとは大きな違いがあることがわかった。
- ・子どもの中に目標となるイメージを持たせるために模範演奏を聴かせる。そうすることで追求のなかで「まだイメージに近づいていない」という意識をもたせることができる。

# よりよい表現を追求するための指導の工夫

名古屋小学校 加藤 幸子

## I はじめに

本校音楽科では、表現の活動と鑑賞の活動を一題材の中でかわらせながら、音楽を特徴付けている要素や音楽の仕組み（以下、要素や仕組み）に着目させた指導を行い、子どもたちにその働きをとらえさせながら表現したり鑑賞させたりすることで、音楽の面白さやよさ、美しさを感じ取らせ、表現に対する考えをもたせるための研究を行ってきた。また、自分たちの表現を客観的にとらえさせる活動（トライアルタイム）に取り組みさせることで、要素や仕組みを考えの基として、自分たちの思い描いた表現をよりよいものにしようと試行錯誤し、表現を追求することができるようになってきた。

このような子どもたちに、よりよく表現ができるようになった実感をもたせ、そしてさらに次の活動へのめあてをもち、引き続きよりよい表現を追求させたいと考え、本研究を行った。

## II 研究の内容

前述の目的を達成するために、本研究では、自分たちの表現を振り返る活動と表現のできばえについて意見交流を行う活動に取り組みせる場を設定し、その成果を検証した。

よりよく表現できるようになったことを実感させるために、トライアルタイムに取り組んだ次時の学習において、トライアルタイムの最後の表現と表現教材に出合った時の表現を聴き比べ、振り返らせる。また、「次の活動でも思い描いた表現に近づけるために練習を続けよう」という強い気持ちを抱かせるために、アドバイスタイムに取り組み、互いの表現を聴き、要素や仕組みを考えの基として、表現のできばえについての意見交流をさせる。そうすることで、次の活動へのめあてをもたせることができると考えた。

以下に、3年生で行った題材「曲想を感じて音色を工夫して表現しよう（9時間完了）（主教材：「森の子もり歌」（蓬萊泰三：作詞 菊地雅春：作曲 佐伯孝一：編曲）」の実践の様子を述べる。

### <自分の表現を振り返る様子>

前時のトライアルタイムの最後の表現と「森の子もり歌」に出合い譜読みをした後の表現とを聴き比べ、音色の違いを判断した。



トライアルタイムの最後の表現は、母さん鳥は優しい音色、ちびっこ鳥は陽気な音色になっているね。思い描いた音色になっているね。

初めて歌った時の表現は、母さん鳥もちびっこ鳥も音色が同じだね。トライアルタイムの最後の表現の方が、音色が曲に合っているね。

トライアルタイムで練習をしたり、録音したりして、繰り返しがんばったからね。

### <アドバイスタイムに取り組む様子>

次に、ペアグループとアドバイスタイムに取り組んだ。聴く側は、一度目の表現では、トライアルタイムで思い描いた音色になっているかどうかを判断し、意見交流を行った。二度目の表現では、要素や仕組みを考えの基として、よりよい表現になるためのアドバイスをを行い、意見交流を行った。

母さん鳥は優しい音色、ちびっこ鳥は元気な音色を表現することができているか聴いてください。

次のトライアルタイムもがんばろう！



母さん鳥は優しい音色、ちびっこ鳥は元気な音色になっていたよ。

リコーダーと歌が重なるところのバランスに気を付けるともっといいよ。

## III 考察

振り返りタイムにおいて、子どもたちはトライアルタイムの最後に録音した表現を聴き、トライアルタイムで思い描いた表現ができていると感じ取ることができた。また、「森の子もり歌」に出合い譜読みをした後の表現と比べ、トライアルタイムの最後に録音した表現の方が、音色がよくなっていると感じ取ることができ、よりよく表現できるようになったことを実感することができた。

アドバイスタイムにおいて、子どもたちは、よりよい表現ができるようになったのは、トライアルタイムで表現の試行を繰り返した成果であることを感じ取ることができ、次のトライアルタイムでも新たに思い描いた表現へ向かってがんばって取り組もうという強い気持ちを抱いて本時の学習を終えることができた。よって、ペアグループに対して二度の表現を発表したアドバイスタイムの設定は有効であったと考える。

以上のことから、本研究で行った指導の工夫は有効であったと考える。

# 表現を振り返り高めていくための指導の工夫

名古屋小学校 富所 妙子

## I はじめに

美しい表現をすることができたと感じたとき、子どもたちはさらによりよい表現をめざしたいと願うのではないかと考える。

本校音楽科では、表現の活動と鑑賞の活動を一題材の中でかかわらせながら、音楽を特徴付けている要素や音楽の仕組み（以下、要素や仕組み）に着目させた指導を行い、子どもたちにその働きをとらえさせながら表現させることで、音楽の面白さやよさ、美しさを感じ取らせ、表現に対する考えをもたせるための研究を行ってきた。また、自分たちの表現を録音して客観的にとらえさせる活動（トライアルタイム）に取り組ませることで、子どもたちは要素や仕組みを考えの基として、自分たちの目指す表現をよりよいものにしようとし、表現を追求することができるようになってきた。

このような子どもたちが、自分たちの表現を高めることができたという実感を持ち、その実感を次の活動への意欲へとつなげ、引き続きよりよい表現を追求できるようにしたいと考え、本研究を行った。

## II 研究の内容

表現の高まりを実感し、よりよい表現を追求していくために、本研究では、自分たちの表現を振り返る活動と表現のできばえについて意見交流を行う二つの活動に取り組む場を設定し、その成果を検証した。

【振り返りタイム】表現の高まりを実感するために、トライアルタイムに取り組んだ次時の学習で、トライアルタイムの最後に録音した表現と、表現を創作した直後に録音した表現を聴き比べ、振り返らせた。

【アドバイスタイム】「次の活動でもよりよい表現にするために練習を続けよう」という強い気持ちを抱かせるために、二つずつのグループでペアを組み、互いの表現を聴き、要素や仕組みを考えの基として、表現のできばえについての意見交流をさせた。

以下に、2年生で行った題材「おまつりの音楽を作って表現しよう（9時間完了）（主教材：「おまつりワッショイ」（きたかみじゅん：作詞 吉原順：作曲）」の実践の様子を述べる。

### <振り返りタイムに取り組む様子>

前時のトライアルタイムの最後に録音した表現と「おまつりワッショイ」のかけ声と太鼓のリズムパートを創作した直後に録音した表現とを聴き比べ、創作した通りのリズムで表現できたかを確認した。

歌唱に合わせて、タンタタンウンのリズムをたたくことができるようになったね。



太鼓のリズムとかけ声がきこえるように練習したね。

トライアルタイムで練習したり、録音したりして、上手に歌えるようになったね。

### <アドバイスタイムに取り組む様子>

次に、ペアグループとアドバイスタイムに取り組んだ。聴く側は、一度目の表現では、かけ声と太鼓のリズムが正しいリズムで表現できたかを判断し、意見交流を行った。二度目の表現では、要素や仕組みを考えの基として、よりよい表現になるためのアドバイスをを行い、意見交流を行った。

私たちは、このリズムを作りました。聴いてください。



太鼓のリズムの音が作った通りのリズムできこえたね。

かけ声も歌唱に合わせて入れることができているね。

正しいリズムで表現できているから、ニコちゃんマークを出そう。

## III 考察

振り返りタイムにおいて、子どもたちはトライアルタイムの最後に録音した表現を聴き、創作したかけ声と太鼓のリズムのパートを正しいリズムで表現できていることを確認することができた。また、かけ声と太鼓のリズムを創作した直後の録音と比べ、トライアルタイムの最後に録音した表現の方が、正しいリズムで、また、パート間のバランスがよくなっていると感じ取ることができ、よりよく表現できるようになったことを実感することができた。振り返りタイムで自信をもった子どもたちは、アドバイスタイムにおいて、自信をもって表現を発表したり、相手のグループに対して、よりよい表現ができるようになるためのアドバイスをしたりすることができるようになり、次のトライアルタイムでもよりよい表現にするためにがんばって取り組もうという強い気持ちを抱くことができた。

以上のことから、振り返りタイムとアドバイスタイムを設定した本研究は有効であったと考える。

# 自分たちの表現を振り返り、よりよい表現を追求するための指導の工夫

名古屋小学校 野田 英里子

## I はじめに

音楽の授業において聴くことは重要である。なぜなら、表現を工夫しても自分の思い描いた表現になっているのか聴き、振り返ることをしなければ自分の思い描いた表現になっているのか判断することは難しい。また、音楽を特徴付けている要素や音楽の仕組み（以下、要素や仕組み）に着目させて聴くことで表現を深めたり、音楽の面白さやよさ、美しさを感じ取ったりすることができる。つまり、自分や友達の表現を聴くことにより、工夫されている表現のよさに気づき、その気づきを次の活動へ生かし、よりよい表現を追究したいと思えるよう、本研究を行った。

## II 研究の内容

前述の目的を達成するために、本研究では、表現の試行を繰り返す活動（トライアルタイム）とトライアルタイムの次時に表現のできばえについて意見交流を行う活動（アドバイスタイム）に取り組ませる場を設定し、その成果を検証した。

まず、自信をもって演奏できるように全体で譜読みを行い、基礎的な能力を高める。その後グループに分かれ自分たちの思い描いた表現になるようにトライアルタイムに取り組み、思い描いた表現になっているか録音を使い振り返らせる。また、できるようになったことを実感させるために、アドバイスタイムに取り組み、互いの表現を聴き、要素や仕組みを考えの基として、思い描いた表現になっているか判断したり、表現がよりよくなるようにアドバイスをしたりするなど意見交流をさせる。そうすることで、次の活動へのめあてをもち、よりよい表現を追究したいという思いをもたせることができると考えた。

以下に、5年生で行った題材「音の重なりを感じて表現しよう（11時間完了）（主教材：「ルパン三世のテーマ」（大野雄二：作曲 終ゆきえ：編曲）」の実践の様子を述べる。

### トライアルタイムに取り組む様子

トライアルタイムでは、録音機器を使い自分たちの表現を聴き、意欲的に練習に取り組んだ。しかし、「柔らかい音色にしたいね」「強弱をもっとつけたいな」という思いはあるものの、録音を聴いてみると何度表現しても自分たちの思い描く表現に近づかないことがあった。その現状に教師が気づき、2種類のマレットで木琴を演奏し、二つの音の違いを聴き比べさせた。児童はどうして二つの音の音色が違っているのか考え、マレットが違うことに気がついた。そのようにマレットの種類を変えることで音色の違いがでることに気づかせた。

### アドバイスタイムに取り組む様子

前時でトライアルタイムに取り組み、児童は自信をもって演奏できるようになった。そこでペアグループを作り自分たちの表現を発表し、アドバイスタイムに取り組んだ。表現するグループは音楽の要素の何に気を付けて演奏したかを相手グループに伝えた後、表現を二度行った。聴く側は、一度目の表現後は、相手グループがトライアルタイムで思い描いた音の重なり方になっているかを判断し、意見交流を行った。二度目の表現後は、要素や仕組みを考えの基として、よりよい表現になるためのアドバイスをし、意見交流を行った。意見交流では、付箋を使い気づいたことをメモして相手のグループのペアの子に具体的な解説をつけながら渡した。また、アドバイスタイムの後に、友達からもらったアドバイスをグループに持ち帰り、話し合うことで次時のめあてをもつことができた。



音の重なりに気を付けました。主旋律が目立つように最初はリコーダーを、イからは鍵盤ハーモニカを強く演奏します。副旋律は少し弱めになるように練習しました。

最初のリコーダーはよく聴こえているな。イからは副旋律が強すぎるかな。

リコーダーが主旋律のときはよく聞こえていたよ。次は鍵盤ハーモニカの主旋律を目立たせるといいね。他の楽器を弱く演奏してみたら？



そうか。鍵盤を強くしようと思ったけど、他の楽器を弱くするのもいいね。試してみるよ。

## III 考察

トライアルタイムにおいて、録音を聴くことで児童は何ができて何ができていないのかを明確につかむことができ、教師は児童の迷いやどのように練習をしていけば表現がよくなるのかという疑問に適切に支援することができた。また、アドバイスタイムにおいて、児童は表現をよりよくなるためのアドバイスを聞き、具体的に次へのめあてをもつことができた。さらに児童は、ペアグループの表現を聴き、

気づいたことを自分たちの表現に取り入れていくこともできた。  
以上のことから、本研究で行った指導の工夫は有効であったと考える。

## 聴き感じ取る力を高め、表現を構築する力を育む音楽科の授業

名古屋中学校 井垣 智恵

### I はじめに

本校音楽科は、目指す子ども像を「音楽を聴き感じ取る力を高め、表現を構築することができる子ども」と設定し、研究を進めている。ここでいう「音楽を聴き感じ取る力」とは、題材にかかわる楽曲を鑑賞し、音楽の要素や構造の働きによって生み出される曲想や、他者が表現しようとしている意図を明確にする力である。また、「表現を構築する力」とは、他者が表現しようとしている曲想や意図を踏まえながら、自分がどのような表現をしていきたいのかということ、音楽の要素や構造の働きに着目して明確にする力である。これらの力を育むことが、生涯にわたって音楽に親しむ態度を養うことにつながると考え、実践に取り組んでいる。

### II 研究の内容 第2学年「日本の伝統音楽を味わおう（箏を使った創作活動）」

本題材では、「反復」と「変化」に着目して聴き感じ取る力を高め、表現を構築する力を育むことをねらいとした。これらの力を育むために、以下の具体的な手だてを講じ、表現の課題を「表現したいイメージをもって、『さくらさくら』のオスティナートを創作しましょう」とし、3人1組のグループで箏を使った創作活動を行わせた。

【表現をつかむ場】では、「反復」と「変化」の働きを捉え、生み出される曲想を明確にするために、「反復」と「変化」の働きが明確である楽曲を鑑賞させた。【表現を構築する場】では、それぞれの表現したいさくらのイメージにより近づけるために、グループ同士で演奏を聴き合い、感想やアドバイスを交流したり、自らの演奏をICレコーダーで録音させ表現を見直させたりした。

### III 研究の結果

【表現をつかむ場】では、「風の通り道」と「ねこバス」を主旋律の背後に流れるオスティナートに着目させて鑑賞させ、「反復」「変化」するオスティナートが生み出す曲想とイメージについて学級全体で意見発表をさせた。「風の通り道」では、「同じテンポで同じリズムが繰り返されている旋律が主旋律に重なっていることから、風が通っている感じや木々が風に揺れている感じ」という意見が子どもたちから出された。「ねこバス」では、「リズムがよく繰り返される旋律を主旋律に重ねることで、わくわくと元気に走っていて躍動感がある感じ」という意見が子どもたちから出された。

【表現を構築する場】では、あるグループは、「さくらが咲いている華やかさと散ってしまうはかなさを表現したい」とグループのめあてを設定し、創作活動に取り組んだ。演奏を聴き合い、感想やアドバイスを交流する場面で、「表現したい華やかな感じは出ていたが、主旋律とオスティナートの音量のバランスが悪い」「オスティナートをもっと弦の真ん中で演奏すれば、柔らかい音が出るので、はかない感じに合うのではないか」といったアドバイスを他のグループからもらっていた。そのアドバイスを受けて、自らの演奏をICレコーダーで録音し表現を見直す場面では、「主旋律が全然聞こえていなかったの、全く全体的なバランスが取れていなかったから、もっと練習してバランスを取れるようにしたい。」「オスティナートが強すぎて音を重ねた時にきたなくなってしまうので、オスティナートの音色を工夫したい。」と見直すポイントをまとめていた。

### IV まとめ

【表現をつかむ場】では、音楽の要素や構造の働きが明確である楽曲を鑑賞させることで、着目させたい音楽の要素や構造の働きを子どもたちにつかませることができた。【表現を構築する場】では、グループ同士で演奏を聴き合い、感想やアドバイスを交流したり、自らの演奏をICレコーダーで録音させ表現を見直させたりすることで、それぞれの表現したいさくらのイメージにより近づけようと表現を工夫することができた。ただ、Ⅲで記したように、創作表現を演奏表現で見直す場合、聴き取りやすい「強弱」や「音色」、「音の重なり」に着目して表現を見直した子どもが多かった。演奏をする上で、これら

の要素を工夫させていくことは必要不可欠であるが、題材で指導したい音楽の要素や構造の働きに重きを置き、表現を工夫させていく教師の働きかけを今後見直していく必要がある。

## 聴き感じ取る力を高め、表現を構築する力を育む音楽科の授業

名古屋中学校 松本 亜由子

### I はじめに

これまで、子どもたちは音楽の要素の働きと、それらによって生み出される曲想を捉えることで、音楽を聴き感じ取る力を高めてきた。また、捉えた音楽の要素の働かせ方を工夫し、自分たちの音楽表現に生かすことで、表現を構築する力を育んできた。しかし、表現を構築する場では、子どもたちは働かせ方を工夫しやすい「強弱」や「速度」のみに着目しがちで、他の音楽の要素にも着目すると音楽表現がさらに豊かになるということをまだ理解できていない段階にあると感じる。そこで、着目させたい音楽の要素を題材ごとに明確にし、子どもたちに様々な音楽の要素の働かせ方を工夫させる手立てを講じる必要があると考えた。

### II 研究の内容 第1学年「リズムを重ねて楽しもう」

本題材では鑑賞活動とグループでの表現活動を通して「音色」と「リズム・パターンの重ね方（テクスチュア）」に着目させた。それらの要素の働かせ方を工夫し、表現を構築させていくために、ボディパーカッションを教材に取り上げた。講じた手立ては以下の通りである。

- (1) 「音色」と「リズム・パターンの重ね方（テクスチュア）」の働かせ方を工夫することで曲想が生み出されていることが聴き感じ取りやすい鑑賞教材（映像）を扱う。
- (2) 題材を通して取り組む課題として、着目する音楽の要素を子どもたちに提示する。
- (3) 演奏を聴き合う場面において、着目する音楽の要素についての伝え合いが行われるように、ホワイトボードに表現のめあて（場面ごとの目指す曲想と要素の働かせ方）を整理して記述させ、聴く側に表現のめあての内容を示しながら演奏をさせるようにする。

### III 研究の結果

【表現をつかむ場】では(1)の手立てを講じた。ボディパーカッションを映像で鑑賞させることにより、様々な音色をどのような奏法で奏しているのか、また、リズム・パターンをどのように重ねているのかを視覚的にも捉えさせることができ、「音色」と「リズム・パターンの重ね方（テクスチュア）」の働かせ方を工夫することで曲想が生み出されていることを聴き感じ取らせることができた。【表現を構築する場】では、(2)と(3)の手立てを講じた。着目する音楽の要素を課題として提示したことで、子どもたちに提示した二つの要素に着目させて表現を構築させることができた。その活動を基に、グループの表現のめあてをホワイトボードに記述させたことで、多くのグループが提示した二つの要素の働かせ方を工夫した表現で演奏したり、他のグループの演奏を聴いてアドバイスをしたりすることができた。ただ、中には提示した二つの要素に着目して表現を構築したグループの演奏に対し、それについてのアドバイスをせずに「強弱」についてアドバイスをしてしまっている子どもも見られた。【表現を振り返る場】で行った発表会では、様々なグループの演奏を聴き、「音色」の働かせ方を工夫すると音楽表現が豊かになることを聴いて実感させることができた。「リズム・パターンの重ね方（テクスチュア）」の働かせ方についても同様に実感させることができた。

### IV まとめ

着目させたい音楽の要素を明確にして指導を展開していく上で、(1)(2)(3)の手立ては有効であった。「強弱」の働かせ方を工夫しようとした子どもの考えは決して間違いではないが、子どもの音楽表現を豊

かなものにしていくためには、様々な音楽の要素の働きを学習させ、音楽を聴き感じ取る力を高め、表現を構築する力を育てていきたいと考える。子どもの気付きを大切にしつつも、今後も題材ごとに着目する要素を明確にし、様々な題材を通して、様々な音楽の要素の働かせ方を工夫させる学習を進めていきたい。

## 級歌づくりを題材に、体験を通して曲の仕組みを考える授業の実践

岡崎中学校 矢崎 佑

### I 目的

音楽を構成する諸要素のはたらきについて、昨年度は指揮法を題材に楽譜を読み取る体験を通じた授業展開を試みた。その結果、子どもは音楽鑑賞を通して拍子や強弱の変化、楽器の音色の特徴などについて以前よりも多角的な視点から気づいたことを話すことができるようになった。そこで、音楽の仕組みをより具体的に理解できるようにするために、実際に曲を作る体験をしてはどうだろうかと考えた。

### II 方法

本研究では、第1学年の学級活動の時間と連動する形で、学級歌づくりを進めた。学級で話し合った歌詞をもとに、創作表現の時間をあて、下記のような段階で授業を展開した。

- ①歌詞づくり（学級活動における話し合い）
- ②曲の調性や拍子など、基本ルールの検討
- ③グループごとによる旋律づくり

※歌詞を文章のまとまりごとによつて、Aメロ、Bメロ、サビ、Cメロという4つの部分で分担して作曲を進める

- ④試作した旋律についての話し合い
- ⑤楽曲全体の流れを考えての旋律の再考
- ⑥各案をつなぎ合わせ、主旋律を完成

### III 結果

作曲を始めるにあたり、子どもはこれまでに取り組んだ独唱曲や合唱曲の楽譜を読み返し、全体で統一すべきルールについて話し合った。まず初めに、歌詞の内容から明るく前向きな雰囲気のある曲をつくりたいという思いを共有した子どもは、既習の曲を例にあげながらテンポや調について話し合った。そして、自分たちが今までに取り組んで明るく感じた曲の多くがハ長調であることがわかった。また、歌詞の区切り方を考える中で多くの子どもが4拍で区切ることで語呂が良くなると気づいたことから、ハ長調による4拍子の曲にしようとした。また、テンポについては速すぎず遅すぎずというあいまいな設定にし、旋律の形が具体的に合った所で歌いやすい速さを考えることにした。

初めはピアノで自由に音を出しながら各自でアイデアを出し合う時間が続いた。思いついたアイデアを楽譜に書くことができない子どももいたが、友だちが口ずさんだ旋律を聞いて実際に楽譜に書きながら、音符の種類や意味を教える子どももおり、仲間同士で足りない部分を補いながら進める姿が見られた。また、試作した旋律をグループ同士で聴き合う段階では、実際に歌ってみることで新たな問題点を見つけ出す姿が見られた。ピアノで弾いた時には良く聞こえた旋律も、実際に歌うと、音域が自分たちの声域と合致しなかったり、リズムが複雑すぎて言葉を発音しにくかったりした。実際に子どもが試すことで、さらによくするにはどうしたらよいかと他の作品を参考に曲の仕組みを考えようとする姿が見られた。また、部分ごとに試作した旋律をつなげる段階では、楽曲全体を通しての音の流れや、雰囲気の変化についても何度も話し合いがもたれた。こういった経験を通して、子どもはさまざまな楽曲がどのような仕組みで旋

律を展開させて作られているのかを知ることができた。

#### **IV 考察と今後の課題**

音楽を構成する諸要素のはたらきについて授業でふれる際には、言葉（単語）を知識として覚えることがたいせつなのではなく、子どもがその意味を、音を通して実感しなければ実際に理解して身につけることが難しいことがわかる。それは、活動の過程において、子どもが作曲活動に行き詰まる度に、これまで演奏した曲（既習事項）をふり返りながら必要なことを見つけ出し、自分の活動に生かそうとした姿からも見取ることができる。

本研究を進めるにあたり、音符の種類や書き方、拍の長さなど、身につけているべき基本的な知識や技能について、子どもによって習熟度にかかなりの差が見られた。限られた時間数で子どもが身につけた知識や技能を活用することのできる段階まで育てるためには、中学校3年間のみならず小学校からの積み重ねを視野に入れた音楽体験を通しての、系統的な学習計画を見直す必要があるだろう。